

松本清張記念館

◆館報◆
2008.4
第27号

目次

- 松本清張研究会 第17回 研究発表会 2
- 企画展報告「松本清張と松川事件」 4
- 展示品紹介 5
- 清張原風景「点描」 5
- 研究誌「松本清張研究」第九号まもなく発行 6

- 探検！清張記念館 6
- みんなの広場 7
- 友の会活動報告 7
- トピックス 8

現在入手できる本
 『松本清張全集』第49巻（文藝春秋）
 『松本清張小説コレクション18』（中央公論）



『空の城』昭和53年7月発行 文藝春秋

「空の城」は、「文藝春秋」に昭和53年1月号から8月号まで連載された。

「こら失敗りますわ。
 しくじ
わての心眼には
 そう映ってますがな」

作品紹介

一九七三年十月、世界最大の豪華客船クイーン・エリザベス二世号は、千人に上る招待客を乗せてカナダのニューファンドランド州へ向けて出航した。最新機器を備えた石油製油

所・PRCの開所式のための、一週間に亘る絢爛たる船旅である。PRCは州政府の設立(クラウン・カンパニー)で、管理運営を委任されているNRCの社長・サッシンがこの船旅を主催した。江坂産業の系列会社・江坂アメリカは、原油の供給元BPとNRCとの代理店契約を結んだ。江坂は総合商社として石油部門の利益拡大による躍進を目論んでいる。上杉常務はサッシン側に有利な補助契約を社主や常務会に伏せてまで、代理店契約にこぎつけた。PRCがクラウン・カンパニーであることで江坂本社の信用も得られ、邦銀も競って融資を申し入れてきた。サッシンのみならず上杉にとっても、輝かしい船出だった。江坂産業の社主・要造は、古陶磁の蒐集家で、その審美眼と直感によるコレクションは当代随一である。骨董品に耽溺し社の運営には殆ど干渉しないが、人事権を握っているため、要造の顔色を会長以下皆が窺っている。上杉にはこの成功で、社主からの冷視を挽回し、社内での評価を上げる思惑もあった。

しかしこの年の第四次中東戦争勃発に伴い、石油危機が生じる。製油所の操業停滞と原油価格の高騰によりNRCは破産、江坂も莫大な負債を抱える。日銀までが事態收拾に乗りだし、PRC設立からわずか三年を待たずして「地球のように絶対に崩壊することはないと信じられた」巨大総合商社・江坂産業は事実上の倒産に追い込まれた。安宅産業の崩壊という実際の事件に材を取り、巨大商社の内幕と人間関係を壮大に描き出す。

(学芸員 小野 芳美)

三度目の九州地区開催でしたが、会員及び友の会会員、一般参加など90名が参加し、質疑応答なども活発で盛況でした。

講演

松本清張の アンテナ

—新しいものは使える—



講師

赤塚 正幸 氏

北九州市立大学教授。松本清張研究会理事。

研究分野：日本現代文学（大正から昭和にかけてのモダニズムの文学）
日本近代詩（伊東静雄、雑誌『コギト』
『四季』『荒地』の詩人たち）

研究業績：『注釈』（『芥川龍之介全集』第6巻、
岩波書店、1996）
『清張・初期作品における「旅」』
（『松本清張研究』、2002）

「四分間の空白」と偽装「情死」

「点と線」の中に、「四分間の空白」というのがある。東駅の十三番ホームから十五番ホームの特急列車あさかぜを見通すことができるという、その四分間。これは一日の内の四分間なのだが、その空白の発見。それと、そこで行われた出来事、具体的には小雪という料亭の女中さんに、お時と佐山があさかぜに乗るところを目撃させる。その意味を解いていくというのが「点と線」の中心的なストーリーリーになっていく。

「四分間の空白」の発見の出発点は清張自身の通勤のときの経験で、その辺りのことを清張自身が書いていて、すごく私の注意を引きます。「その時に使った例の東京駅の十三番線ホームから十五番線の九州行きの長距離列車が見通せるということは、やはり経験でないとはわかりません」。で、二行とぼして、「九州行きの列車が見える日と見えない日がある。私は九州の人間ですから、九州行きの列車が非常に懐しいので、よく眺めていたものですが、その列車が間のホームの列車に妨げられて見えないときがある。それは日によってではなく、実は時間によって見えたり見えなかつたりすることがわかりました」。それで調べるわけですね。そして、最後の三行ですが、「これはいくら時刻表をひっくり返して見ても、余程のベテランでない限り発見できません。これもひとつの経験であります」と書いてる。ホームから九州行きの列車が見える日と見えない日があることに気づいても、そのままにするのが我々。好奇心と探究心の塊みたいな清張だから、気づいて、見えるときと見えないときの差は一体何だと思って、調べていく。

もう一つ、「あさかぜ」が走るのは、昭和三二（一九五六年）の十一月十九日。「点と線」は、昭和三二（一九五七年）の「旅」という雑誌の二月号から連載が始まっている。「あさかぜ」の運行開始を知ると同時に、「空白の四分間」を見つけ、作品に入れる。「あさかぜ」が作品の中に入るまで、時間的に慌ただしい。単に物としての「あさかぜ」を登場させるのだったら、次の日でも小説は書けるわけ

す。ところが「空白の四分間」を使うとなると、とてもそうはいかない。しかしそこが清張という作家の面白いところだと思えます。

「点と線」のそもその発想、執筆動機は、「新聞で心中が捜査の対象から外されているというのを知り、この心中が実際は心中ではなくて殺人事件だったらどうだろうと考え」たところにある。心中が心中ではなく、殺人であるような小説。別々の犯人が別々の殺人を行って、そして殺された人間の死体を並べて「情死」を装う。ここに、清張の優れた思いつきがある。そして、我々読者が読んで佐山の死を納得するような条件は、彼が所属する某省の汚職事件の捜査が進んでいること。それから、佐山が課長補佐であるということ。現実に課長補佐がよく死ぬ、自殺する。新聞などでよく見るそういう現実があつたから、「点と線」の中で佐山が死んでも、読者は何も不思議に思わない。そして、恋仲ではない二人を偽の恋人同士にしていくのに利用されたのが、「四分間の空白」。そういう手の込んだトリックを、読者を納得させるためにやっている。その目撃場面から、我々読者も死んだ二人が恋仲で、「あれは情死だな」という読み方をしていくわけです。東京駅での清張自身の経験が、一つの物語の重要なトリックになっていく。日常の何でもない出来事が物語の骨格を決めていく。ここに清張という作家の、現実に対する対し方の面白さを見てとることができる。

「トリスバー」と「ロケット」と「電子音楽」

「砂の器」は、「トリスバー」の店内から物語が始まります。「トリスバー」は昭和三十年頃に生まれて、爆発的な人気



を呼んだ、庶民的なバーです。安月給のサラリーマンだとか大学生などがよく通って、一番飲まれてたのはアルコールを炭酸で割ったハイボール。「砂の器」でも彼らが飲むのはハイボール。それは非常に新しいライフスタイルだったけど、「トリスバー」から物語を始めたのは実は、庶民的なバーだという側面から選ばれたと思う。殺された三木謙一の服装が、くたびれた背広、ワイシャツも下着も安物。そういう格好の三木を何十年ぶりかに見て、犯人の和賀は「トリスバー」に連れてきた。彼の服装を見て警察も当初、殺された人間は労働者だと見る。和賀の企みは、要するに殺された人間の身元を分からなくするところにあつた。ずーと読んでいくと分かる。「トリスバー」で始めなければならぬ、やつぱり意味があるんです。

清張は、犯人が属していた「ヌーボー・グループ」という若い芸術家連中に、「ロケット」を見に行かせる。これは何でだと思いませんか？ 何でロケットなんか見に行つたのか、東北の秋田くんだりまでですね。岩城町。実は日本でも、有名な糸川教授のロケットの実験から始まってロケットを造ることが流行つた。「秋田では高校生の研究禁止」昭和五年か三六年頃、日本の「あぶないロケット熱」というような加熱状況を踏まえて、ロボットを見に行かせているんですね。彼らは既成の価値観を否定して、新しい芸術をうち立てようとしている若者の集まりなのです。そういう新しいものを求めていく連中が時代の新しい要素であるロケットを見に行く、そのこと自体は何も不自然ではないわけですね。それと、岩城の横に羽後亀田という町がある。警察の捜査の方向が本当に羽後亀田の方に向いているかを確かめに、和賀がグループを誘って行つてるんですね。これは作品の内部の問題です。それを支えているのが、当時の日本のロケット熱だと言えらると思います。

同じように「電子音楽」だとか「ミュージック・コンクレート」なども、同じ役割を果たしている。要するに、電子の技術などを使った音楽が新しい芸術としてあるんだよと言っておいて、その電波なり超音波なりに対する読者の抵抗感をなくしているわけですね。だから、その後で超音

波による殺人というのが出ても、なるほどとなるわけですね。

時間を撮す「カメラ」と「飛行機」

「時間の習俗」は時間によるアリアバイ・トリックの話です。そのために使われたものが「カメラ」と「飛行機」。「点と線」では「飛行機」は後の方になって使われるが、「時間の習俗」ではもう最初から出てきます。五年ほど間があるんですが、「飛行機」の普及を背景にしている。

「カメラ」については、一眼レフがどんどんカメラの主流を占めるようになって、昭和三十年代半ば以降から日本がドイツを追い抜いて、世界一のカメラ生産国になっていく。それが一つ背景にある。「時間の習俗」では、「カメラ」が実は、風景や物や人を写すだけではなくて、時間を写している。時間を記録している。そういう意味を発見するところから、カメラを使ったアリアバイ・トリックの物語が出来る。作品の中で、時間を記録するものとして、犯人が門司の和布刈神社の神事を写した写真があり、そのアリアバイが崩せない。



あと、三原警部補は「月賦」でテレビを買ったとなつていいる。もう一つ、「ゲイボーイ」のこと。「ゲイボーイ」の誕生地」の方は昭和三二

年で、さきほどの女装の男殺しは三五年。だから、三十年代はゲイボーイというものが取り敢えず、みんなの耳目を集めていた。「時間の習俗」の中では、服装が、男と思つたら女で、女と思つたら男だった。そのことで三原警部補がゲイボーイというのを思いつく、ということになっていいる。「時間の習俗」は、

そういう「月賦」や「ゲイボーイ」という時代の風俗現象を上手く取り入れている。

風俗のむこうに時代を感じる

「点と線」は犯人も判っている。「空白の四分間」も分かっている。「あさかぜ」は今もう走つてない。だから、読まなくていい作品かというところ、決してそうではない。清張の場合は、風俗、つまり創作時に視野に入つたいろんな社会現象の向こう側に、何年何月何日という形で限定され、貼り付けられる出来事ではなく、一つの時代を見ることが出来る。時間的な原風景の、物のない時代がその向こうに見えるだろう。だから、風俗現象を書いても、十年後、二十年後、五十年後に古びることがない。具体的な物、あるいは出来事について探っていくことで、我々は逆にそういう変わらない時代に触れることができるのではないか。

研究発表

『熱い絹』とジム・トン・プソン失踪事件 ——松本清張と東南アジア世界

発表者
久保田裕子氏 福岡教育大学准教授。



研究分野
日本近現代文学（三島由紀夫）

研究業績

「三島由紀夫被翻訳作品書目」
（決定版三島由紀夫全集）第
42巻、新潮社、刊行予定

「熱い絹」から始まって、結果的に昭和三十年代の「純文学変質論」や「読書論」などを軸とした、三島由紀夫と松本清張との共通項と差異について発表された。

平成十九年度後期特別企画展

松本清張と松川事件

特別企画展「松本清張と松川事件」は、昭和二四年に発生した列車転覆事件「松川事件」への清張の取り組みを、福島大学松川資料室の全面的な協力のもと、当時を物語る貴重な資料を多数展示し、紹介しました。好評につき開催期間を延長してお届けしました。



元被告の本田昇さん、松川資料室の伊部正之先生、松川運動記念会の古屋恒雄・雅代さんご夫妻もご来場くださいました。



昭和38年最高裁に宛てた要請書(パネル)

松 川事件は、まだ日本がGHQの占領下にあった昭和二四年に、福島県松川で発生した列車転覆事件です。下山事件・三鷹事件など、国鉄に関わる事件が続いた後に起こり注目を集めました。逮捕された二十名の被告は、法廷で事件への関与を否定し続けますが、一審・二審とも有罪判決が下されます。

獄中からの訴えに耳を傾け、裁判に疑問を持った文化人の一人に、広津和郎がいました。自ら事件現場に足を運び、第二審の判決文の矛盾点を突いた「松川裁判」を四年半に亘って「中央公論」に連載しました。この昭和二九年ころ、各地に草の根運動のように「松川守る会」が発足し、日本中で被告を支援する動きが生まれました。

清 張は昭和二八年に上京します。松川運動への最初の関わりとして、三二年七月の第一次現地調査に参加しています

が、このころはまだ新進作家でした。

翌三三年の『点と線』などのヒット以降、流行作家として多くの連載を抱えるようになります。しかし、松川事件への関心は持ち続け、多忙な執筆活動の合間を縫って各地での講演に足を運び、多くの聴衆に自ら訴えかけました。三六年八月の仙台高裁では、多くの文化人と共に傍聴席で無罪判決を聞いています。三八年の最高裁宛の要請書では、広津和郎・志賀直哉・川端康成ら名だたる文壇の先輩作家十人とともに、清張も署名しています。

この企画展では、初公開の直筆原稿を含めて、松川事件に関する清張のとらえと新たな一面をご紹介します。

天保武鑑

「天保図録」の序文には、水野家から東京都立大学に寄贈されたばかりの（^{おびただ}夥しい文書）に清張が触れ、執筆にあたり「新資料をできるだけ使ってみたい」と意気込みを語った箇所がある。この史料への積極的なアプローチが、当時の社会制度の深い考察と風俗の緻密な描写を可能にし、リアリティあふれる歴史・時代小説を生んだのだろうか。

展示品である『新版改正 天保武鑑』も、清張が所蔵していた史料の一部である。

武鑑とは、江戸期に出版された大名や幕府の諸役人の名鑑（人名録）のこと。展示中の『天保武鑑』は小本と呼ばれる書型で、藍色の装丁がされており、巻一、巻二は「御大名衆」、巻三は「御役人衆」、巻四は「西御丸附」の四冊組みとなっている。



さて、巻之「水野家」の項目をみれば、本国と一族庶家の系図がずらりと並んだのち、現藩主「西御丸御老中水野越前守忠邦」の名と家紋がある。「武鑑」では、家督を継いだ年月や位階、現住所、入室や主だつ

た家臣の名や、席次（江戸城での話所）、参勤交代の期日、道具印や時献上季節ごとに將軍家に贈る物産品、菩提寺にいたるまで記されている。この『天保武鑑』を出版したのは武鑑板元の最大大手、須原屋茂兵衛。江戸時代には、これだけの情報を収めた書物が、民間の書肆（本屋）で編集され、出版されていたのである。

ちなみに「天保図録」に武鑑の名はみられないが、「両像 森鷗外」で、鷗外の祖父の白仙が津和野藩主の参勤交代に同行した時期を、（亀井候は八月参府、六月御暇である（武鑑）と割り出すくだりがあり、武鑑を史料として使用していたことが窺える。

森鷗外も、武鑑を蒐集していたことで知られており、「浪江抽齋」では（徳川史を窮むるに闕くべからざる史料）と、その史料的价值を高く評価していた。

武鑑は当時、実用書としてだけでなく、地方に住む人々の土産物としても購入されたそうである。人々は武鑑をめくりながら、見たことのない江戸に思いを馳せたのだろう。鷗外と清張は、同じように思いを馳せながら、作家としてそれぞれの江戸の時代と人々を描き出したのだろう。

（学芸担当 池上 貴子）

清張原風景 点描

魚町 うおまち

「兵庫屋のちに小倉商工会議所になったほどの五階建ての堂々とした赤煉瓦館だった。年の暮の寒い日に私がその兵庫屋をのぞきに行ってみると、峯太郎は入口の土間で、店名を染め抜いた紺の法被と股引で下足番仲間といっしょに働いていた。兵庫屋の売場は畳であった。土間から売場にかけて小旗が張りめぐらされていた。父は私を見ると、よう来たのう、寒くないか、と声をかけた。どのような苦境でも彼は悲観した表情を見せなかった。へえ、まいどおおきに、などと明るい声を出して着飾った女客らを迎え、肥った身体を窮屈そうにかがめて揃えた履物に紐を通したり、客の帰りには合札を取ってその前に履物を揃えたりしていた。」（骨霊の風景）

四十歳を過ぎていた父・峯太郎は下関から小倉へ移った後、魚町（当時の鳥町）の兵庫屋に下足番として雇われた。兵庫屋は、中津商人が大正七年頃開店した呉服を主にした百貨店であった。当時は客が下駄を脱いで畳のある売場上がったという。

魚町には、清張が通った洋食レストラン「ボンボン」（平成七年閉店）があった。



兵庫屋を買い受けた小倉商工会議所



この店の平成四年の新聞広告には、「四十年前は小倉でのわたしの『青春時代』で残っていた。魚町の横丁はまだ終戦後の混乱に入ると楽しさ。ステーキのうまさも舌にじつとりと融けこむ。調理場の幽暗な中に燃える火。赤煉瓦の台。わたしには銅版画のような想出である。」と清張の推薦文が掲載されている。清張の青春時代の一ページが垣間見られる。

魚町は、旧藩時代に魚屋関係の店が軒を並べていた。その後、城下町の商店街として発展し、昭和二六年、日本初のアーケードが完成すると、「銀天井に輝く商店街」と謳われ全国の注目を集めた。それ以来、屋根のある魚町銀天街は、雨の日でも多くの買い物客で賑わっている。（礎 政幸）

研究誌『松本清張研究』第九号 まもなく発刊

特集は「**世界への視座**—清張の海外取材」です。

松本清張は早くから国内に留まらない「世界への視座」を持ち、最晩年に至るまで世界にその鋭い視線を向け、海外にテーマや舞台を求めた作品を世に送りつけました。出来上がり次第、記念館ホームページでお知らせします。



*バックナンバーは好評発売中です。通信販売をしていますので、ご利用下さい。
(創刊号1,500円、2号~5号、7、8号各2,000円、6号2,200円)

『神々の乱心』と二十年前の思い出

佐野真一

国民作家の覚醒した意識——集合的無意識から離れて

辻井 喬

松本清張と世界の旅

郷原 宏

齊明天皇と「麻葉の酒」——『火の路』としてのシルクロード

山内昌之

「白と黒の革命」を読み返す

酒井啓子

『聖獣配列』を読んで

猪口 孝

『霧の会議』の背景

馬場康雄

タイと太平洋戦争——『熱い絹』の背景

玉田芳史

何が清張に『空の城』を書かせたか

高任和夫

『アムステルダム運河殺人事件』——古典的な本格探偵小説

綾目広治

〈天然の密室〉と松本清張さん

大村彦次郎

「清張取材」から知った五つの神髄

浅井泰範

松本清張先生の「旅の章」

道川文夫

スイス取材の松本清張

堤 伸輔

——「と」ころでおたくの秘密主義は「と」二十回——

清張 曼荼羅——文字と映像の間

藤本裕子

再録 国際推理作家会議で考えたこと(全集・単行本未収録)

松本清張

老よしとハルコの探検! 清張記念館

B1F 喫茶「石の館」“清張からの年賀状”の巻

きよし この清張の年賀状は、ここの社長の親御さんがもらったものなんだよね。^{*1}



ハルコ 本格的な絵が描かれていたり、俳句がそえられている年もある。さらっと書いてある風なのがまた心憎いわね。

きよし あれほど多忙だった清張なのに、いつ書いていたんだろう。顔も広いだろうし、年賀状書きに没頭して、年末ごろは編集者を泣かせていたんじゃない?

ハルコ その逆。年末ぎりぎりに編集者が訪問したときも、年賀状を書いている様子はなかったそう。大晦日から正月にかけて、ごく親しい人にだけ書いていたんじゃないかしら。^{*2}



きよし アリバイなき年賀状! ミステリーだね。それだけ貴重な年賀状なんだ。

ハルコ 清張にとって私人に戻れるひとときだったのかもね。他人に見せたくなかったというのは考えすぎかしら。自分の世界に入った手紙は後で恥ずかしくなったりするし。ああ、それはきよし君の夜中のメールか(笑)。この間も…。

きよし お願い。それ以上はやめて。

*1 館報3号インタビューに関連記事

*2 館報11号展示品紹介に他の方宛て年賀状関連記事

「年賀状は、贈り物だと思う(今年度の日本郵政キャッチコピー)」。石の館ご来店の際には壁の額もぜひご覧ください。心を込めて書いたであろう筆遣いからは、清張の気遣いも伝わってきます。

みんなの広場

今回は、最近お寄せいただいたアンケートの中から、記念館を訪れてみての感想を掲載しました。

・書齋をながめているだけでも和みます。まさに創作の「城」。著書を読んだらまた来たいと思います。

(30代 大分 女)

・原稿と「思索と創作の城」をみて作品の生まれる状況を知ることができました。

(50代 神奈川 男)

・松本先生の偉業に圧巻です。執筆だけでなく写真や絵も素晴らしいですね。

(30代 高知 女)

・作家自身の教養の深さに触れてとても良い刺激を受けました。こういう環境に一時的にでも身を置くことが、とても良い頭の切り換えになる気がしました。

(60代 岡山 女)

・私は作家を目指しているので、心を原点にもどしたい時にはまた訪れたいと思っています。

(40代 大阪 女)

・巨人の執筆量に圧倒され軽い疲労を覚えました。一日ですべてを見ることのできないほどに充実した展示内容ですので、必ず近いうちにまた参ります。

(30代 大阪 男)

・清張の地に足をつけた作風に強くひかれました。

(30代 県内 女)

・松本清張さんという作家のエネルギーを感じることができました。また、もっと作品を読んで来館したいと思います。

(20代 広島 男)

このコーナーでは、アンケートなどでお寄せいただいた意見をご紹介します。

清張や作品に対する思い、エピソードなど何でも結構です。皆さんの「声」を是非、記念館までお寄せください。

※アンケートは館内にも置いてあります。

友の会 活動報告

友の会事業の中で最も参加者が多く毎年大好評の朗読劇も今年で5回目を迎えました。この朗読劇は清張と深い関わりのあった劇団「前進座」のみなさま方によるもので記念館の屋外を特設会場にし、わずかな照明と音響、そしてせりふだけで原作を表現する大変素晴らしい公演です。

脚本も毎年新しく書き下ろされ、原作を大切にしてお下される劇団の思いがこもっている素敵なものに仕上がっています。

これまでに『西郷札』、『或る「小倉日記」伝』、『天城越え』、『鬼火の町』と公演していただきましたが、どれも様々な演出がほどこされ毎回違った感動が生まれます。

今年は、開館10周年…2夜連続で行われた公演はどちらも感動的で大変素晴らしいものでした。

毎年の春の夜の屋外公演…素敵な空間で清張作品を体験してみてください！

●平成15年度

『西郷札』 記念すべき第1回目

残念ながら悪天候で急遽館内での公演



●平成16年度

『或る「小倉日記」伝』

念願かなっての屋外初公演

役者さんの熱の入った素晴らしい公演に観客も涙涙…



●平成17年度

『天城越え』

花冷えの中石垣にさくらが舞い散り美しい公演でした。



●平成18年度

『鬼火の町』

時代小説に挑戦！役者さん達も着物姿で演出に花をそえました。



友の会会員募集!!

ただいま友の会では新規会員を募集中です。松本清張記念館友の会では清張ゆかりの地の見学や読書会・講演会等の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。

会費は、8月から翌年7月までの1年間で3,000円となっております。

■友の会事業

- ・講演会、シンポジウム等の開催
- ・映画ビデオ等の上映会の開催
- ・読書会、文芸講座等の開催
- ・会報の発行
- ・松本清張ゆかりの地、他都市の文学館見学事業の実施 など

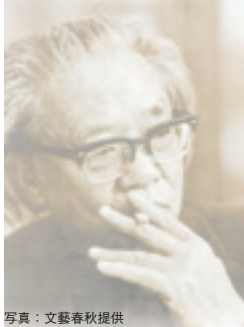
■会員特典

- ・常設展の招待券(年間4枚)進呈
- ・企画展(年2回)のご招待
- ・記念館主催事業のご案内・参加
- ・記念館広報誌(館報)・企画展図録進呈
- ・友の会主催事業のご案内、会報の進呈
- ・友の会オリジナルグッズの進呈(加入年度のみ)
- ・喫茶「石の館」(記念館内)の飲食料金1割引

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

平成20年度 中学生・高校生

読書感想文 コンクール



写真：文藝春秋提供

昨年に引き続き、清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親しんで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからを担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神が伝えられていけば幸いです。

■応募対象 全国の中学生・高校生

■課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品

『或る小倉日記』伝(文春文庫『宮部みゆき責任編集 松本清張傑作短篇コレクション 上』、新潮文庫『或る「小倉日記」伝、カッパ・ノベルズ『西郷礼』)

『点と線』(新潮文庫『点と線』、カッパ・ノベルズ『点と線』)

『左の腕』(文春文庫『無宿人別帳』、新潮文庫『佐渡流人行』、カッパ・ノベルズ『遠くからの声』)

■応募方法

- 中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募原稿はお返しいたしませんので、必要な場合はコピーをおとりください。

■応募締切 平成20年10月31日(金)必着

■応募先 〒803-0813 福岡県北九州市小倉北区城内2-3
松本清張記念館 感想文コンクール係

※応募用紙は記念館公式HPからダウンロードできます。

■選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■発表

- 審査結果は、12月下旬頃、本人と学校に通知します。
- 最優秀賞、優秀賞の受賞者には、表彰式を行います。
- なお、入選の結果や受賞作品を記念館刊行物等に掲載することがあります。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■賞品 (受賞人数等、変更の場合もあります。)

- 最優秀賞(1人)(モンブラン)万年筆「マイスターシュテックNo.149」
- 優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人) 文具(未定)
- 佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人) 記念館グッズと図書券
- ※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各一回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は「特別賞」として「館報」掲載を予定しています。

●主催 北九州市教育委員会

●主管 北九州市立松本清張記念館



2009年

編集・発行 松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR:小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からは100円バスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車:北九州都市高速、大手町ランプより5分

第11回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

- 対象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。
- 内容 入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成21年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

2007年度・ドラマ化された清張作品

2007.1.30	「地方紙を買う女」	日本テレビ
2007.11.24,25	「点と線」	テレビ朝日
2007.12.7	「殺人行おくのほそ道」	フジテレビ
2007.12.17	「塗られた本」	TBS
2008.2.20	「不在宴会」	テレビ東京

大切なお知らせ

松本清張記念館「友の会」は、松本清張作品の愛好者や関心を持つ人たちが広く交流し、松本清張とその作品及び記念館についての理解を深めていくことを目的として設立されました。

いまだに「友の会」を、「清張の会」と称した団体と取り違える方がいらっしゃいます。「友の会」も記念館も「清張」の名前を冠した他の団体と全く関係がないことをお知らせいたします。

●編集後記●

いよいよ平成20年度の幕開けです。8月4日には松本清張記念館開館10周年を迎えます。今後もいろいろな企画を計画していますのでご期待ください。(礎 政幸)

